

は じ め に



私の手元に「基礎生物学研究所10年の歩み」がある。これを繙いてみると、基生研の開設に向けての約10年にわたる先人がたの大変なご苦勞、発足後10年間の創設期スタッフの方がたの基生研を真に第一級の研究所にしようとするご努力の程が手にとるようにわかる。そこに名を連ねておられる方がたのほとんどは、その後の10年の間に基生研の運営から離れられ、またすでに岡崎の地を後にしておられる。しかしその精神は、現在の所員達によって脈々と受け継がれている。

基生研の第一期の10年には、生理学研究所と同居の旧愛知教育大図書館の時代から始まって、現在の3研究系13部門が次々に設置され、各施設も含めた建物の大部分が建てられた。世間ではバイオテクノロジーという言葉がもてはやされ、生物学の既存の諸分野は分子遺伝学や分子生物学ときしみ合いながら、その手法を研究に取り入れていった。生物学にとっても基生研にとっても、急速な進歩もたらされた時期であった。私自身もこの時代から、共同利用研究や基生研コンファレンスでしばしば岡崎を訪れている。

第二期の10年については、これから本小冊子の中で多くの方がたにそれぞれのお立場から語っていただくわけであるが、この間我が国はバブルの進展とその崩壊で戦後最大の経済の停滞期を迎えた。そのような状況もあってこの10年の間には、形質統御実験施設の4部門が新設されたにとどまり、そのための実験棟もやっと20周年を迎える直前になって完成したばかりである。しかし生命諸科学の発展はさらにその歩みを早め、基生研で行われている研究のほとんどすべてが遺伝子レベルで語られるようになり、また実際に基生研も大腸菌の全ゲノム解析にきわめて重要な貢献をした。この時期は所員の新旧交代の大きな節目にも当たっていて、新設部門を含め多くの新しいスタッフが着任した。昭和63年には分子生物機構論専攻として、総合研究大学院大学の学生を受け入れるようになり、自前の院生も持つようになった。私自身はこの10年の最初から評議員として外から基生研を見させていただき、最近の2年間は所長として直接その運営に携わることとなった。創立20周年を目前にして、基生研では点検評価委員会を発足させて自ら及び外部委員による業績評価・機関評価を行うとともに、研究体制ワーキンググループ、将来構想ワーキンググループ及び将来計画委員会において今後のあるべき姿を検討した。その結果、環境及び生物多様性という古くてしかも新しい領域の分子レベルにおける研究が、基生研の取り組むべき大きな課題として示唆されている。ヒト全ゲノムの解読が予定されている次の10年間には、基生研はどれだけのことを成し遂げているであろうか。ともかくここ10年の基生研の歩みを皆さまにおとどけする。

この小冊子の編集に当たっては、鈴木義昭教授のお世話になった。厚くお礼申し上げる。

基礎生物学研究所長

毛利 秀 雄